

岸本英夫の「回心」

－「ガンとたたかった十年間」－

長崎 誠人

要旨

1964 (昭和39) 年に10年間のガンとのたたかひの果てに亡くなった宗教学者・岸本英夫の生死観はこれまで賛否両論をまきおこしてきた。それは、ガンに冒されても伝統的来世観や靈魂観を拒否すると事あるごとに述べていた岸本が、晩年「宇宙の霊」と「大いなる宇宙の生命力」という伝統的来世観や靈魂観とも解されるような言葉を遺したからである。本稿では、岸本は最終的に死の恐怖に負け、来世観・靈魂観を受け容れたのだとする評価を批判し、岸本の生死観は彼の宗教観から理解しなければならないことと、そのように理解した場合、「宇宙の霊」や「大いなる宇宙の生命力」は伝統的来世観・靈魂観を示すものではなく、やはり岸本はそれらを拒否していることを示す。そして、死を「別れのとき」と見ることにより岸本は回心したこと、また来世観・靈魂観を拒否してもなお岸本の生死観は「宗教」と言ってよいものであることを明らかにする。

キーワード：岸本英夫、回心、宗教、生死観、「別れのとき」

はじめに

1954 (昭和29) 年9月28日、宗教学者の岸本英夫は51歳で思いがけない形でガンの告知を受けた¹⁾。それから1964 (昭和39) 年に亡くなるまでの10年間、岸本は折に触れて自らの死の受容の過程と生死観 (煩雑なので、以下「生死観」とまとめることとする) について書き記していった。それらのエッセーは、岸本の没後の1973 (昭和48) 年に、ガンに冒される以前に書かれた生死観をテーマとした数編の論文とともに『死を見つめる心 ガンとたたかった十年間』としてまとめられた。同書は2018 (平成30) 年10月1日に45刷が発行されており、そのことから岸本の生死観が現代の日本人に広く読まれ、受容されていることがわかる。

このように、広く受容されてきている岸本の生死観ではあるが、後で見ると、その受容のしかたはさまざまである。そもそも岸本が最終的に到達した生死観をどのように理解するかという点に関して見方が分かっているばかりでなく、それと関連して、一方でそれを高く評価する者もあれば、反対に低く評価する者もあり、その評価は両極に分かれている。

こうした状況をふまえ、本稿では次の二点を明らかにしたい。一つは、岸本の生死観は、岸本自身が人間の問題を解決するものと理解した「宗教」、しかも岸本が理解した近代社会に生きる人間の宗教 (「自由宗教」) を探求するいとなみとして理解されなければならないことである。そして二つ目は、そのように考えたとき、岸本が到達した「死は別れのとき」という考え方に岸本の死の受容の過程、生死観の大きな転回点、すなわち回心があり、そこにいたる前も後も「宗教」の実践として理解できるということである。

岸本は宗教学者としても個人としても、一言でいえば、合理主義者であり、その立場から伝統宗教の教えや社会における機能に対して否定的であった。しかし、合理主義者だからといって宗教そのものに否定的であったわけではない。「人間の問題」が存在するかぎり宗教は存在するというのが岸本の宗教理解であり、岸本は研究者として近代社会に生きる人間にふさわしい宗教を探求し、また個人としてもそれを探求した。「ガンとたたかった十年間」は、まさしくその探求に充てられた時間であった。

岸本が亡くなってから60年以上の歳月が流れ、人間も社会もさまざまな面で大きく変わった。しかしながら、日本社会において伝統宗教の力が低下し、それに代わる「宗教」の探求はなお続いているという意味においては、岸本が生きた時代と現代とのあいだには連続性がある。そうだとすれば、岸本の生死観を明らかにする試みは、現代人の宗教を理解するのに十分な宗教概念の探求にほかならないとも言えるだろう。

なお、本稿における岸本英夫の引用はすべて『岸本英夫集 第1巻～第6巻』(溪声社、1976年) から行うこととする。また、文末脚注における出典は、エッセーのタイトル、発表の日付、『岸本英夫集』のページを示すこととする。

1. 問題の所在

本章では、岸本英夫の生死観を扱った先行研究において何がどのように問題とされてきたのかを検討し、そこから先行研究の問題点を浮かび上がらせていくこととする。

岸本の生死観をめぐって評価がわかる最大の理由は、宗教学者である岸本が近代合理主義者であり主知主義者であることをもって自任しており、またそうであるが故に、自らの死に直面してもなお既成宗教の説く生死観を信じることはできないと述べたことである²⁾。なるほど、近代合理主義と主知主義は青年期から死に至るまで、岸本の一貫した態度であったと言えそうである。まずそれを確認してみたい。

岸本の父はクリスチャンで、同志社で学び、後に早稲田に移り、姉崎正治とともに日本における宗教学の制度的基礎を築いた岸本能武太である。家庭の雰囲気は敬虔なクリスチャンのそれであったようであり、岸本自身も子どもらしい熱心な信仰をもっていたという。しかし、青年期にいたって岸本は、奇跡を行う伝統的人格神を信じられなくなりキリスト教を棄てる。そして、それとともに天国や地獄といった来世の存在も信じなくなったという。そのことについて、岸本が自分自身の近代的知性によって然らしめられたものと語るのは後年のことである³⁾ けれども、青年期の岸本が近代合理主義・主知主義の立場にあったと見ることを妨げるものは何もない。

また、宗教学者としての仕事においても、近代合理主義と主知主義の立場はいかんとなく発揮されたと言えるだろう。1961(昭和35)年に発表された著書『宗教学』において、岸本は宗教学の学問的位置づけを試みているが、その際にまず宗教学を客観的宗教研究と捉え、主観的宗教研究とされた神学・宗教哲学から区別した。次に客観的宗教研究の中でも、宗教学は体系的な研究とされ、歴史的研究である宗教史から区別された。その上で、もっとも狭義の宗教学、すなわち客観的かつ体系的な宗教学は、今日ほとんど使われることのない「宗教科学」という名称でも呼ばれた⁴⁾。宗教現象自体の非合理性や非科学性といった性格とは明確に区別し、宗教学を経験的、実証的な科学として構築しようとする意図がそこにはあらわれている。

そして、もちろんガンの宣告を受け、生死観を彫琢する中で語られる言葉にも、近代合理主義と主知主義の立場ははっきりと表れている。1961(昭和36)年7月16日にNHKテレビで放送された「別れのとき」と題する講話の中に、次のような言葉がある。

私は、いろいろの宗教を外側にたって研究することを専門としている学究である。いろいろの宗教の教えについては、表も裏も知っているつもりである。世間で行われている宗教には、天国、地獄、極楽浄土など、死後の生命について説いているものが多い。しかし私は、そのような死後の世界があるとは、考えていない。死に直面したギリギリの場に立っても、私の心は、そのような世界があり得るということに納得できない。むしろ、死後の世界があると考えたならば、どんなに気持ちよさそうと思うほどである⁵⁾。

最初の大手術から半年余りの苦しい闘病生活の後に訪れた3年ほどの小康状態が、恐れていたガンの再発によって破られ、そこから大小十数回の手術と皮膚移植を行ってきた頃に述べられた言葉である。苦しいガンとのたたかきにも関わらず、また信じることができればどれほど楽であろうと思いつつも、岸本は死後の世界の存在をきっぱりと否定している。つまり、岸本はガンによる「生命飢餓状態」⁶⁾にも関わらず、その近代合理主義と主知主義の立場には揺るぎがなく、「死後の生命の存続」を拒否しているのである。

そして、ここまで見てきた岸本の立場は死の直前でも変わらなかったように思われる。岸本は1964(昭和39)年1月25日にガンの脳への転移により東京大学医学部付属病院で死去するが、その約3か月前の日付があり、絶筆となった「わが生死観」⁷⁾においても、近代以前の天国や浄土といった来世・他界観と、近代になって現れてきた「この自分」の意識の存続の観念、この二つの意味での「死後の生命の存続」を信じることができないと述べている。死によって「生理的構造が何もなくなった後で、「この自分」という意識だけが存在することが可能だと考えようとするのは、相当に無理があるのではなからうか。」⁸⁾と述べる岸本は、あくまでも近代合理主義と主知主義の立場を拠り所としていた。

このように青年期から死に至るまで、一貫して近代合理主義と主知主義の立場に揺るぎがなく、「死後の生命の存続」を拒否したというだけでも、そのような宗教学者・岸本が最終的にどのように自らの死を受容したのか、彼の生死観はいかなるものであったのかに興味がつきない。

ところが、それにくわえて、岸本は数少ないながらも「死後の生命の存続」を認めたかのようにも見える言葉を遺しており、その言葉は青年期以降、終生一貫していた岸本の合理主義の立場と整合するのか、もしかすると岸本は生命飢餓状態におかれて、最終的に近代合理主義と主知主義の立場を貫くことができなかったのではないかという疑問が深まり、その点をめぐって議論がわかれている。問題となる岸本の言葉は次のようなものである。

すでに別れを告げた自分が、宇宙の霊にかえって、永遠の休息に入るだけである。私にとっては、少なくとも、この考え方が、死に対する、大きな転機になっている⁹⁾。(「別れのとき」1961年7月)

私にとっては、私の個人の生命力というものは、私の死後は、大きな宇宙の生命力の中に、とけ込んでしまってゆくと考えますが、精一杯であります。それは、言いかえれば、私という個人は、死とともになくなる、ということでもあります¹⁰⁾。(「私の心の宗教」1962年7月)

たとえば宮家準は、ここにある「宇宙の霊」の語に注目し、「ここで興味をひくことは、実体があるのは唯この世の生だけだと強く確信していた合理主義者の彼が、死の恐れがもたらした信念のぐらつきななかで、宇宙の霊に帰って休息するという独自の他界観を案出していることである。このことは死に直面した人間にとって他界の存在を信じるのがいかに大きな安らぎを与えるかということを示しているとも思えるのである。」¹¹⁾と述べている。死の恐怖によって合理的信念が揺らぎ、たとえ岸本のオリジナルではあったとしても、彼が否定し続けてきた他界を信じることによって安らぎを得たという見方である。

窪寺俊之も、上記引用部分からは、岸本の「生死観に潜む矛盾」が「暴露」されるという¹²⁾。まず、窪寺は「大きな宇宙の生命力の中に、とけ込んでしまってゆく」という部分を、岸本が自分の霊の存在を認める発言であると捉える。その上で、岸本の生死観が、死後、人間の霊が宇宙の霊にかえって永遠の休息に入るとするものだとすると、それは科学的合理主義ではなしに、アニミズム的理解であると、結論として次のように述べる。

岸本が「別れをつげた自分が、宇宙の霊にかえって、永遠の休息に入るだけである」という言葉は結局、岸本自身の生命が永遠に継続することを願望していたことを暴露している。合理的に割り切ることの出来ない魂の問題を抱えている岸本が浮かび上がってくる。科学を信頼し、科学的思考のみで判断した岸本の中に、永遠を求めるとの願望があることが解る¹³⁾。

岸本が近代合理主義・主知主義の立場から、健康なときには彼がまさしく拒否していた他界観・死後世界観に転じたとする主張を宮家準と窪寺俊之にそくして見てきたが、首肯しかねる点がある。まず、両者ともに依拠しているのが、岸本が亡くなる1年半前までのエッセーであり、しかも「宇宙の霊」、「大きな宇宙の生命力」について自分の生死観とも取れるように述べているのは、上に引用した二ヶ所しかないということである。上に示した「別れのとき」

(1961年)と「私の心の宗教」(1962年7月12日)の後、1964年1月25日の死去までにはあと三篇のエッセー¹⁴⁾がもたれているが、そのいずれにおいても、「宇宙の霊」、「大きな宇宙の生命力」への言及はなされていない。

次に、先の二つのエッセーにおいて、岸本が他界観・死後世界観について自分の生死観のように言及しているとしても、それによって死の恐怖が克服されたとは即断することはできないことである。というのも、岸本は、人間にとって何よりも恐ろしいのは「この自分の意識」が消滅するということであり、「死後の生命の存続」は「この自分の意識」が存続するかどうかの一点にかかっていると理解していた¹⁵⁾。すなわち、岸本にとって「死後の生命の存続」の問題と、「この自分の意識」の存続の問題は異なるものであるが、宮家も窪寺もそれを区別せずに、岸本が否定し続けた他界観・死後世界観によって死の恐怖が克服されたものと理解しているからである。

さらに、「宇宙の霊」や「大きな宇宙の生命力」について、岸本は、それらを天国や地獄、浄土といった伝統的ないわゆる来世・他界とは異なるものと理解していたと言える。それは、ガンに冒される前に書かれた「生死観の類型—生死観四態—」において、第二類型の「死後における生命の生存」の説明に現われている¹⁶⁾。そこで、伝統的な靈魂観と来世観・他界観を説明した後に、岸本は現代の文化の進展、科学的思想の展開、批判的精神の発達によって、そうした伝統的な靈魂観、来世観・他界観は現代人には受け入れがなくなり、生死の問題の解決に悩む人が非常に多くなったという。そうした事態を反映して、新たな生死の問題の解決の努力が現われてきたという文脈において、「あるものは個的な靈魂の存在に納得し得ず、宇宙に遍満する大生命の存在を信ずる。死によって個我を脱した場合に、自己の生命は普遍的な宇宙生命の中に溶け込んでいくと考えるのである」という言葉が現われている。そして、生死の問題の解決のための現代の新たな努力を総括する言葉として、「死後の生命の問題は、人間の実証的判断の限界外にあることに、人々は気づいてきたのである。」と述べる。以上から言えるのは、岸本が述べる「宇宙の霊」と「大きな宇宙の生命力」は、個別性を特徴とする伝統的靈魂観とは異なるものであり、しかも死後の生命の問題ではなく、むしろ現世における問題と捉えられているということである。したがって、「宇宙の霊」と「大きな宇宙の生命力」への言及をもって、岸本が近代合理主義と主知主義の立場から転回したと言うことはできない。

ここまで、岸本がそれまでの立場から転回して死後の生命の存続を信じるようになったとする先行研究について検討してきた。次に、逆の立場、すなわち岸本は死への恐れに負けて、死後も靈魂は存続し「この自分」という意識を保つことができると信じることによって生命飢餓感を満たしたのではなく、ガンとのたたかひの果てにそれとは異なる道がひらけてきたとする中村みどりの論考¹⁷⁾について検討する。

中村は、岸本がガンの宣告を受けてしばらくは死を恐れて「生命飢餓状態」に陥っていたが、亡くなる前には「死の恐怖の影が心から消えた」、「命ある限りしなければならぬ自分の仕事を考えて明るい希望にあふれている」と述べたことに注目し、このような心境の変化との関連で岸本の死後世界観を理解する。それによれば、岸本が使う「宇宙の霊」は個人的意識の存続を前提とする伝統的な靈

魂とは異なり、純粋な生命そのものであり、個人の生命から「この自分」という意識を抜き取った「純粋な意味での生命力」だけが死後に残り、それが「大きな宇宙的なエネルギー」に溶け込むことが「宇宙の霊にかえる」という言葉の意味であるという¹⁸⁾。岸本には、このような生命観がガンに冒される前からあったが、それはあくまでも観念的なものにとどまり、「生命飢餓状態」に陥った岸本を満たすものではなかった。ところが、その同じ生命観が結局は岸本の晩年の宗教であったと中村は言う。晩年の岸本は個人的な生命とは区別された、この世に存在する輝かしい実体であり、また人間にとって光にも等しい〈生命〉を肯定したのだという。観念的に把握されていた生命観であったが、成瀬仁蔵の思想との出会い¹⁹⁾によって、それぞれの使命ともいべき仕事に専心することによって〈生命〉が拡充されること、またそれを自分自身の生命とも感得できるようになり、そこに生死を超えた幸福が実感されるようになった。

中村の議論は、大筋において首肯できるものである。とりわけ、岸本の生死観を、ガンに冒される以前から岸本が追及していた近代社会を生きる人間の宗教、すなわち人間の問題を解決しようとするいとなみとして理解している点には共感できる。ただ、岸本の心境の変化、すなわち観念的な生死観が血となり肉となってゆく変化の説明には物足りなさが残る。中村は、成瀬仁蔵の思想との出会いが岸本の心境を変化させたとして述べている²⁰⁾が、その説明は主知主義的傾向が強い。それは、たとえば岸本の次のような言葉を上手く説明できるだろうか。そこには知性による納得とは異なる説明が必要となるように思われる。

二年ほど前のある日、私は、女子大の成瀬先生記念会で講演を頼まれ、準備のために、先生の書かれたものを読んだ。その時に、私は、ふと、「別れのとき」ということに気がついたのであった。／(原文改行) 死というのは、人間にとって、大きな、全体的な「別れ」なのではないか。そう考えたときに、私ははじめて、死に対する考え方が、わかったような気がした(傍点長崎)²¹⁾。

以上、岸本の生死観をめぐる先行研究を検討してきたが、そこから明らかになったのは以下の二点である。第一に、岸本の生死観は、人間の問題を解決するものと理解されていた「宗教」を探求するいとなみとして、しかも近代社会に生きる人間の宗教を探求するいとなみとして理解されなければならないということである。第二に、そのように岸本の生死観をとらえたならば、まず明らかにされなければならないのは、来世や他界といった死後の世界ではなく、現世において超越の契機がどこにどのように見出されたかである。伝統的な来世観・他界観、また個人の意識の存続を保証する靈魂観念を否定する岸本の生死観をなお「宗教」と呼びうるとすれば、それはどのような意味においてなのか。次章では、このような視角から岸本の生死観において、死を「別れのとき」と見ることがどのような意義を有するのかという点を中心に検討してゆく。

2. 「別れのとき」の意味

死を「別れのとき」と見るようになったことが、岸本のガンとのたたかひにおける大きな転機となったことは岸本自身が述べていることである。すでに引用している部分と重なるが、繰り返しのいと

わずにもう一度引用してみたい。

二年ほど前のある日、私は、女子大の成瀬先生記念会で講演を頼まれ、準備のために、先生の書かれたものを読んだ。その時に、私は、ふと、「別れのとき」ということに気がついたのであった。／(原文改行) 死というのは、人間にとって、大きな、全体的な「別れ」なのではないか。そう考えたときに、私ははじめて、死に対する考え方が、わかったような気がした²²⁾。

すでに別れを告げた自分が、宇宙の霊にかえて、永遠の休息に入るだけである。私にとっては、少なくとも、この考え方が、死に対する、大きな転機になっている。(「別れのとき」1961年7月)

また、それが岸本の生死観において大きな転機をもたらしたことは先行研究においても例外なく認められてきた²⁴⁾。しかし、「大きな転機」とは具体的にどのようなことなのだろうか。上記の岸本の言葉を丁寧に見ると、成瀬仁蔵の書いたものを読んで、まず死は「別れのとき」ということに気づき、次に、そのように考えたときに「死に対する考えかた」がわかったような気がしたとなっている。そうだとすると、岸本がわかったような気がした「死に対する考えかた」とはどのようなものなのか。

岸本自身は、引用部分に続いて次のように述べる。すなわち、人間は生きている間に大小さまざまな別れを経験する。深い別離の悲しみをともなう別れであっても、人間はそれに耐えていける。死も全面的であるという以外、その他の別れと異なるところはない。死も、そのつもりで心の準備をすれば耐えていけるのではないか。それなのに、全面的な別れである死について、むしろ人間は準備をせずにのぞんでいる。日々の生活の中で、つねにこれが最後かもしれないという心構えをもっていけば、心の準備が整えられ、死に際しても執着なく別れてゆけるのではないか。

このような岸本自身の言葉を根拠にして、「別れのとき」の意義は理解されてきた。しかし、岸本がわかったような気がしたという「死に対する考えかた」とはこのようなことだけなのだろうか。そのことを考えるために、もう一度ガン宣告後の岸本の心境の変化を振り返ってみたい。

死は「別れのとき」という認識に至るまでの岸本の心境の変化は、三つの局面に整理できるであろう²⁵⁾。第一は、ガンの告知を受け、生命飢餓状態で死を恐れている局面である。岸本は死後の世界も靈魂も信じることができず、そうすると死は無に近くなり、この自分がなくなってしまうこと以外に、それが何とも恐ろしいと言う。

「このような時に、私の心に、しだいに、二つのことがはっきりとしてきた」と岸本は述べているが、その二つのことのうち、一つ目がはっきりしてきたのが第二の局面である。そこではっきりしてきたのは、人間には無について考えることができないということだ。その考えることができない無を死に結びつけて無理に考えようとするから、死が恐ろしいものとなる。そこで、いっそのこと死後の世界はないのだと心に決め、生命の充実感にあふれるような生き方をしていけば、死の恐怖に打ち勝てるのではないかと考えから、岸本はがむしゃらに働く。そして、そのことによって、生活

態度に一本筋が通ったようであると述べている。

しかし、そのようにがむしゃらに働きながらも、岸本は死とは何かについて考えざるをえなかったという。そして、この問いに思い煩っているときに、成瀬仁蔵の書いたものに出会い、「死」ということに対する考え方の目がひらけた。こうして、死に対する考え方のひらけたのが第三の局面である。

このように見てくれば、岸本が抱えていたのが、死の恐怖という情緒的問題であることは言うまでもないが、そればかりでないことがわかる。もちろん情緒的問題と関連してではあるが、それに加えて、死をどのように考えればよいのかという知性的問題を岸本は抱えていた。死について考えざるをえないというのは、いかにも主知主義的な岸本らしい。

ところで、脇本平也は死について次のように述べている。

人は死を避けては通れない。人は必ず死ぬ。それはわかっている。しかし、死ぬのが何時か、どのような死に方をするのか、それもわからない。たとえばこのわたしも、あと十年くらい生きていられそうな気がするが、明日不慮の事故で死なないともかぎらない。そもそも死ぬということがどういうことなのか、皆目わからない。実際に死を体験した人は、すでに生きてはいない。みずから死を体験し、その体験に基づいて死を確実に証言しうる人は、一人としてこの世には存在しない²⁶⁾。

脇本の言を俟つまでもないかもしれないが、死、すくなくとも「己の死」は人間の経験を超える性質を有している。その意味で死は超越的である。その超越的な死について、岸本ははじめ「無」という、こちらも超越的な概念をもって理解を試みた。そのような岸本は合理的であると言ってよいであろう。しかし、そのような死の理解のしかたが、観念的な死であるならばともかく、自己の主体的な死の問題に対してまったく無力であることを岸本は思い知った。そこに浮かび上がってきたのが、死をどのように考えればよいのかという知性的問題である。

もう一度確認すると、死の恐怖という情緒的問題と、死をどのように考えればよいのかという知性的問題を抱えていた岸本は、死を「別れのとき」と見るようになったことが大きな転機となったという。具体的には、成瀬仁蔵の書いたものを読んで、まず死は「別れのとき」ということに気づき、次に、死は「別れのとき」と考えたときに「死に対する考えかた」がわかったような気がしたという。岸本がわかったという「死に対する考えかた」とはどのようなものなのかが最初の問いであった。

ここまで見てきたことからすでに明らかとなり、それは従来考えられてきた別れの準備をすれば死も乗り越えられるという考え方にとどまるものではない。むしろ、死について何を手がかりにしてどのように考えればよいのかということ、いうならば方法論ともいべきことである。岸本は、第二の局面で、人間には無について考えることができないにもかかわらず、その無を死に結びつけて無理に考えようとするから死が恐ろしいものとなることに気づいた。そこで岸本は、いっそのこと死後の世界はないのだと心に決め、生命の充実感にあふれるような生き方をしていけば、死の恐怖に打ち勝てるのではないかと考えてがむしゃらに働く。これはまさしく「死

に対する考えかた」がわからないかゆえに、死について考えないようにしたということにほかならない。しかし、それでも死について考えることをやめることができなかつたことはすでに見たとおりである。

要するに、超越的な死に、合理的思考にのっとして、超越的な「無」を対置するのではなく、むしろ「別れのとき」という経験的感性的事柄を対置することによって、岸本は「死に対する考えかた」がわかつたような気がしたというのである。そして、このことは超越的な死という問題を主体的な自己の問題としてとらえることが可能になったということの意味する。岸本の次の言葉はそのことを示している。

死というものが、今まで、近寄り難く、恐ろしいものに考えられていたのが、絶対的な他者ではなくなってきた。むしろ、親しみやすいもの、それと出逢い得るものになってきたのである²⁷⁾。

こうして死を「別れのとき」と見ることによって、それまで岸本には明かされていなかった死の相貌がはじめて明らかとなってくる。それが、中村をはじめとした先行研究で指摘されてきた、岸本は「人は日常生活においてしばしば別れの場面を経験するが、準備をすれば乗り越えられる。死はすべてのものに別れを告げる徹底的な別れだが、それも別れの一つと考えれば、準備次第で乗り越えられるに違いないと思うようになった」²⁸⁾ということである。

しかし、先行研究で不十分なのは、死を「別れのとき」と見ることの意義を、思想の問題として捉えてしまっている点である。むしろ、決定的に重要なのは、岸本がそれによって、全面的な別れのときである死に関しても、きちんと心の準備をすれば、死がやってくる、執着なく切れてゆくことができるのではないかと信じる、ことが可能になったことである。それこそが岸本にとっての死の問題の解決であり、救いと言っても、癒しと言ってもよいものである。それは、伝統宗教において、実際に極楽浄土に転生できるかどうかではなく、転生できると信じるようになることが重要であるのといささかも違いはない。死は「別れのとき」との見方は、岸本の「超越」、すなわち経験と超越の二元論を超え、その間を架橋するという意味での「超越」を可能にした。それは岸本にまさしく回心をもたらしたのであった。

死の問題が解決できた岸本はその後、死は実体ではなく、実体であるのは生のみであるという世界観に立ち、すべて捧げ尽す生活の中に幸福はあると考え、与えられた生命を最後までよりよく生きてゆくことを心がけた。

以上で、岸本にとって死を「別れのとき」と見ることがどのような意味をもっていたのかについては、十分に明らかになったと思われるが、「ふと、「別れのとき」ということに気がついた」ということについて一言しておきたい。

ここで興味深いのは、岸本をして「死に対する考えかた」がわかつたと言わしめた、死を「別れのとき」とする見方は非合理的であるということである。そもそもそのような見方が開けてくるきっかけとなった成瀬仁蔵の講演、末期の肝臓ガンに冒された中で行われた成瀬の告別講演ではあるが、そこには「別れのとき」という語は出てこない²⁹⁾。もちろん、成瀬は講演で不治の病についてふれており、

全体としてはこれが最後になるという緊張感が漲っている。また講演の最後には「ではさやうなら、さやうなら皆さん」と惜別の辞もある。しかし、だからといって成瀬のこの講演と、死を「別れのとき」と見ることとのあいだに必然性があるかという、そうは言えない。「ふと〜気がついたのであった」と述べられている通り、死と別れとの対置は、成瀬の告別講演を前提として論理的・必然的に導き出された帰結ではなく、むしろ恣意的に導き出されたものである。その意味で、死を「別れのとき」と見るのは、合理的ではなく非合理的なのである。

青年期以降死ぬまで一貫して合理主義者・主知主義者であり、伝統的な来世観・他界観と靈魂観を否定しながら、みずからの死の問題の解決を探っていた岸本が、最終的にそれを解決するきっかけとなった死を「別れのとき」とする見方が非合理的なものであったというのは非常に示唆的である。岸本はけっして死の恐怖に負けて合理主義者から転じたわけではなく、そのことは合理主義と非合理主義との関係を再考させるものである。

おわりに

本稿では、宗教学者・岸本英夫の「ガンとたたかった十年間」、とりわけ大きな転機となった死は「別れのとき」という見方の意味について探ってきた。そこで明らかになったのは、一言で言ってしまうと、岸本のガンとのたたかい、死の受容のプロセスはさまざまな観点から「宗教」と言ってよいものであるということである。

その一つ目の根拠は、岸本自身がそのように理解しているということである。亡くなる1年半ほど前の1962年7月12日にNHKラジオで話された「私の心の宗教」は、タイトルがまさしくそのような理解を示している。そして、話しの最後は次のような言葉で結ばれていた。

人間にとっては、きわめて身近にある自分の仕事の中に、意味を発見して、それに打ち込んでゆくことに、人生の本当の幸福がある、ということであります。死に直面しながら、死後の生命というものをたよりにしない私にとっての、人間の問題の解決の鍵は、このようなところにあるのであります。これが、私の宗教であり、これが、私が、毎日、生きてゆこうとしている気持であります（傍点、長崎³⁰⁾。

二つ目の根拠は、岸本の宗教理解である。岸本は、宗教を人間の問題の解決にあずかるものと理解し、人間の問題が存在するかぎり宗教が存在すると主張した³¹⁾。天国や地獄といった来世観・他界観や靈魂観を欠いていたとしても、人間の問題の究極的な解決にあずかるのが宗教であるという理解である。岸本は、この自らの宗教観を、みずからのガンとのたたかひのなかで検証した。そして、前章で見たように、死という人間の問題を究極的に解決できるまでにしたという意味で、それは宗教であった。

ここまでの根拠は、あくまでも岸本の主観や宗教観にそくしたものである。その意味において、それは十分な根拠とは言えないかもしれない。そこで、三つめの根拠は次の通りである。

すなわち、岸本のガンとのたたかひ、死の受容のプロセスにおいて、死を「別れのとき」と見たことが大きな転機となったことは誰

もが認めるところであるが、それによってもたらされた超越の契機が決定的な意義をもったことはこれまで指摘されてこなかった。その見方によって、岸本に回心がもたらされ、超越的な死を自己の主体的な問題として捉えることが可能になり、岸本にとって死についての新たな理解が可能となった。このことが岸本の死の問題の解決にあずかり、岸本は死生の安心を得ることができた。

このような岸本の歩みは、伝統的な来世観・他界観も霊魂観も持たないが、「宗教」と呼ぶことに何の問題もない。むしろ、経験につながれた人間の超越について、新たな可能性のひとつを示したと言ってもよいだろう。

ここまで論じてきて、あらためて「死の受容」とはどういうことなのかと考えるてしまう。私たちはどうしても「苦しみのない穏やかな」状態で死を迎えることを「死の受容」と考えてしまうが、岸本のケースによって、そのことについて再考させられるのである。というのも、本稿で論じたように、岸本はまちがいに救われ、死を受容したと言えるけれども、だからといって生命飢餓感から解放されたわけではなく、それは最後まで残ると述べていたからである。もしかすると、生命飢餓感に苛まれ、さまざまな苦しみに悩まされていたとしても、「死の受容」はありうるのかもしれない。こうした問題が残っていることを確認して、稿を閉じることにする。

註

- 1) 1955 (昭和30) 年に発表された岸本英夫「アメリカで癌と闘う記」(『岸本英夫集 第6巻 生と死』89~120頁) によれば、その経緯は次のようなものであった。アメリカのスタンフォード大学に客員教授として赴任していた岸本は、1954 (昭和29) 年4月頃に左頸部に異様な固まりができていくことに気づく。痛みなどもなく、医者に診察を受けて薬を飲んだが、数か月たっても固まりは消えなかったため、念のために摘出することになる。9月下旬の手術の結果、原発巣になることのないリンパ腺からガン細胞が発見され、原発巣の探索と治療が急務ということから、ガンの告知が行われるとともに、最悪の場合には余命が半年と告げられる。
- 2) 岸本は、ガンに冒される前、健康なときから、来世や他界、自分の意識の存続を含めて死後の生命の存続を信じていることができずと述べており、それに対して伝統的な宗教家から、あなたは健康だからそのようなことが言えるのであって、実際死に直面すれば、きっと神にすがり、来世を信じますよと批判されたという(岸本英夫「わが生死観」1963 (昭和38) 年、『岸本英夫集 第6巻 生と死』213~214頁)。
- 3) 岸本、前掲「わが生死観」213頁。
- 4) 岸本英夫『宗教学』大明堂、1961 (昭和36) 年。
- 5) 岸本英夫「別れのとき」1961 (昭和36) 年(『岸本英夫集 第6巻 生と死』144~145頁)。
- 6) 岸本はそれを、戦場に赴くとか、病気になるとか、自分の生存を続けていく見通しが断ち切られる場合に限って、しかも目の近い将来にそのようになる場合に起こる状態と説明している。岸本、前掲「わが生死観」206頁ほか。
- 7) 岸本、前掲「わが生死観」205~218頁。
- 8) 同上、212頁。

- 9) 岸本、前掲「別れのとき」151頁。
- 10) 岸本英夫「私の心の宗教」1963 (昭和38) 年(『岸本英夫集 第6巻 生と死』178頁)。
- 11) 宮家準『生活のなかの宗教』NHK出版、1980年、17頁。
- 12) 窪寺俊之「岸本英夫の生死観について」(『神学研究』45号、関西学院大学神学研究会、1998年、所収)。
- 13) 同上、22頁。
- 14) 「命ある限りゆたかに一ガンでも死なない」(朝日新聞、1963年2月20日)、「宗教的人間観」(『女子大通信』第176号、1963年9月)、「わが生死観」(『理想』第366号、1963年10月)。
- 15) 岸本、前掲「わが生死観」212頁。
- 16) 岸本英夫「生死観の類型—生死観四態—」(『岸本英夫集 第6巻 生と死』246~247頁)。
- 17) 中村みどり「岸本英夫の「死後世界観」—宇宙生命への溶入—」(『宗教研究』354号、2007年、所収)。同「〈生命〉の発見—岸本英夫晩年の「宗教」—」(『宗教研究』376号、2013年、所収)。
- 18) 中村、前掲「岸本英夫の「死後世界観」—宇宙生命への溶入—」109頁。
- 19) 成瀬仁蔵(1858~1919) は、日本における女子教育の開拓者であり、日本女子大学を創立した。クリスチャンで牧師でもあった。1919 (大正8) 年成瀬は肝臓ガンで亡くなる。その直前、成瀬は日本女子大学の講堂に向向き、告別講演を行う。岸本は、日本女子大学で行なわれる成瀬の「告別講演」記念日に講演を依頼され、成瀬の書いたものと出会う。
- 20) 中村、前掲「〈生命〉の発見—岸本英夫晩年の「宗教」—」88頁。
- 21) 岸本、前掲「別れのとき」147~148頁。
- 22) 同上、147頁。
- 23) 同上、151頁。
- 24) すでに見たとおり、中村みどりは岸本の心境の変化の契機のひとつをここに見ている。
- 25) 岸本、前掲「別れのとき」144~152頁。
- 26) 脇本平也『死の比較宗教学』岩波書店、1997年、40頁。
- 27) 岸本、前掲「別れのとき」149頁。
- 28) 中村、前掲「〈生命〉の発見」88頁。
- 29) 成瀬仁蔵「我が継承者に告ぐ」(『家庭週報』第502号・告別講演、1919年1月)、『成瀬仁蔵著作集』第三巻(日本女子大学、1981年、989~998頁) に所収されている。
- 30) 岸本、前掲「私の心の宗教」187頁。
- 31) 岸本英夫「人間と宗教」(『岸本英夫集 第1巻 人間と宗教』7~52頁)。